

チャンネルをどこに合わせても、今日はそのニュースばかりだった。

『突然の停戦から一夜が明けました。人類統合機構とミュウの代表団の会談は、本日宇宙標準時十時より、聖地地球^{テラ}で行われます……』

「なあ、姐さん」

その中継画面を肴に、グラスをなめながらロメロが訊ねた。

「姐さんの昔なじみは、何考えてるんだ？ ミュウたちを絶体絶命の罠に誘い込んでおきながら、いきなり停戦、会談だなんて」

その質問に、スウェナは盛大に溜息をついた。いわれなくとも昨日から、そのことばかり考え続けて徹夜で頭が痛いのだ。

「キースに訊いてちょうだい、そんなことは。わたしにわかるわけないでしょ」

「訊くのは姐さんのお仕事だろうが」

「訊いて素直に答えるような相手だと思おう？ 軍機を盾に完全に取材拒否よ」

「情報を分析するのもお仕事だろ」

「不十分な情報からは、不正確な結論しか出ないわよ」

「そう言い返すと、スウェナは目を閉じて深々と椅子に沈んだ。

「……昔から、そうよ。キースの考えてることが、わたしにわかった試しはないわ」

あのときもそうだった、とスウェナは思い出した。最初に別れを告げたとき。

(何とかいつてやれよ、キース)

そう促したサムに対して、彼は真顔でこういった。

(何をいえばいいんだ?)

あの瞬間にはつきりとわかった。これは、望んでも絶対になわなないものだ。

たとえ、伝説の宇宙鯨を見たとしても。

だからエリートコースを捨てた。望んでもかなわなないものを見続けることに、これ以上耐えられない、と思ったから。それなのに、また。

(わたしは見続けている)

「そうか……」

そんなスウエナのようすに、ロメロはひよいと肩をすくめた。

「姐さんでも無理、となっちゃあ、こいつはもう、誰にもわかんねえな」

その言葉にスウエナは片目を開けて、ロメロを睨んだ。

「……どういう意味？」

「どうって、そりゃ」

その質問に、ロメロはにやりと笑った。

「宇宙広しといえども、あの国家主席閣下を、ファーストネームで呼び捨てにできる女など、姐さんくらいのもんだから」

「……単なる癖よ」

スウエナはそっけなくそう答えた。ロメロは再び肩をすくめると立ち上がって大きく伸びをした。

「となると、おれたちは会談の結果発表を待ってるしかねえってことか。やれやれ」

じゃあそれまで一眠りしてくらあ、と老船乗りは隣室に消えた、その背を見送って、スウエナがもう一度溜息をついたときだった。

肌身離さず持つている通信端末が、軽快な音を立てた。

(通信?)

ポケットから取り出したその画面に、スウエナは真顔になった。

(ハイパーウェーブ通信? 発信元は……この座標は!)

ソル太陽系第三惑星。

『地球』

(まさか)

スウエナは震える指で通信を開いた。無機質な文字が画面上に並んだ。

『発：キース・アニアン』

宛：スウエナ・ダールトン

タイトル：なし

本文：なし

添付：圧縮動画ファイル』

「……ファイル解凍」

『パスワード入力：私にくれた約束のもの』

その文に、スウエナは思わず苦笑した。

「ずいぶん用心深いのね、キース」

そしてその指はためらわずにふたつの単語を押した。

『ピーター・パン』

『パスワード合致。解凍開始……終了』

次の瞬間、端末画面に一つの姿が映った。

(キース)

このところすっかり板についた元老の制服姿だった。だが、何かが違くとスウエナは感じた。

(あなた、どうかしたの?)

思わずそう呟いてから、そう感じ取れること自体がおかしい、とスウエナは気がついた。

国家騎士団からパルテノンの元老にまで上り詰めたキースだ。エデュケーションナル教育 ステーションでも国家騎士団でも、コンピュ

ータの申し子だの冷徹無比な破壊兵器だのという異名を奉られた彼なのだ。

だからこそ、おかしい。

いま画面に映っている彼は、『コンピュータの申し子』ではないと、スウエナは直感した。あるいは彼女だからこそ、

感じ取れたのかもしれないが。

画面の中のそのキースは、まっすぐにスウエナの顔を見つめると、静かに口を切った。

『諸君、きょうは、一個人キース・アニアンとして話をしたい』

さして長くもない録画が終了すると、画面は灰色に戻った。

しかし、スウエナはそのことにも気づかず、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

「これが……」

これが、この世界の真の姿。

地球の荒廃という教訓から、マザー機械コンピュータによって人類の欲望を制御し、平和に秩序立って宇宙と調和してきたSD体制の真の姿。

穏やかな眠るような日々の中で、でも自分はずっと、何かが違うと思っていた。大人の社会に旅立っていったはずなのに、一瞬だけ戻ってきた幼なじみ。軍が隠し続ける宇宙鯨。望んでもかなわないものを追い続けることに疲れたとともに、何かが違うと思い続けていたからこそ、エリートコースを捨てた。そして愛する娘を手放すことになっても、夫と別れた。夫は優しい人だったけれども、この世界に何の疑問も抱かない人だったから。別れて、この世界の真実を知ろうと思った。そして知った宇宙鯨の真実。ミュウの存在。その長となっていた幼なじみ。

けれども、最後に現れたこの真実は、あまりにも。

「……これだったのね、キース」

スウエナは低く呟いた。

「あなたはこれを知ったのね。だから、あなたは……」

その声が、不意に激した。

「でもあなたね、こういうものをわたしに送りつけるなら、わたしにも、せめてなにか一言いったらどうなのよ！」

送られてきたのはその動画ファイルだけだった。本文もタイトルも何もなし。

机に叩きつけた手が震えた。

「ほんとうに、最初から最後まで、あなたって人は……」

その瞬間、脳裏に甦ったのは、最初に別れたときのあの言葉だった。

(何をいえばいいんだ?)

今と変わらずまっすぐすぎる目で、彼ははっきりとこういった。

(スウエナが決めることだ)

その言葉に、スウエナは口角を上げた。

「……そうね」

最後に現れたこの真実は、この世界の真の姿はあまりにも無惨だった。けれども知らなかった方がよかつたとは、自分には絶対に思わない。

おそらくは、彼も。

「わたしが、わたしたちが、決めることよね」

スウエナは顔を上げると、ファイルを保存した通信端末を手に立ち上がった。

「ロメロ、みんな、スタンバイしてちょうだい。すぐに全宇宙域ネット放送をやるわ」

隣室で、驚いた同志たちが駆け回り始める音が聞こえ始めた。その物音を聞きながら、スウエナはもう何も映していないその画面に語りかけた。

「あなたの思いは確かに受け取ったわ、キース。結果がどう出るかは、わからないけど」